

## 本校のディベート実践報告

札幌市立北野台中学校 清水 顕史

2月に本校でおこなった2つの実践報告をおこないます。まず、2月7日におこなった「女性専用車両論題」について報告します。

きっかけは北海道新聞に掲載された記事で、札幌市営地下鉄が女性専用車両導入を検討し、市民の意見を募集していることを知り、ディベートを通じてさまざまな意見を出し、札幌市交通局に中学生の意見を届けようと考えたところからこの実践はスタートしました。

残念ながら札幌市交通局の職員を招いて試合をするという最初のプランは実現しませんでした。教育現場への新聞導入を進めるNIE（教育に新聞を）の関係で北海道新聞から取材を受ける中、校内試合が行われました。

中学校1年生8名がそれぞれ肯定側・否定側に分かかれ、肯定側は「痴漢被害の減少」「痴漢冤罪の防止」の2点をメリットとして提示しました。現状の問題として女性を狙った痴漢犯罪、男性の痴漢冤罪が増加している実態を証明し、女性専用車両が導入されれば「女性と男性の快適な乗車」が実現することを主張しました。対する否定側は「一般車両の混雑」をデメリットとして提示し、専用車両導入によって男性が乗車する一般車両が混雑し、不快な思いをする男性や専用車両に乗らない女性が痴漢被害にあう危険性と、専用車両内の女性のマナー低下を主張しました。

この試合は果たして痴漢被害が増えるのか、減るのかといった点が争点としてかみ合い、お互い具体的な資料を提示していたのでジャッジとして本校にお招きした北海道支部副支部長の岡山さんも判定に困っていました。結果的には肯定側が勝ちましたが、議論の比較をきちんと行うことに課題が残りました。

参加した生徒の感想の中には「論題についての理解が深まった」「初めて立論を一から作っていい経験になった」「質疑と反駁の連携の大切さを学んだ」「ディベートは試合までの準備が大事だということ学んだ」「リサーチのコツがわかった」など、実践を積むことで基礎的な部分に気づいてくれたようでした。また、校長を筆頭に学校

職員が多数見学に来てくれたことや3月27日付で北海道新聞にこの試合の様子が紹介されたことも励みになったようです。

もうひとつは1年選択社会での授業実践です。25名の生徒が履修し、後期16コマの中で3つの論題を設定して、一人必ず1試合経験できるように取り組みました。ほとんどがディベート初体験の生徒になるので、シナリオディベート形式で試合を進め、最後の第2反駁だけ各グループに必ずひとりいるディベート経験者が試合の流れに沿ってスピーチをおこないました。

論題は1年生でも取り組めるように「ドラえもんを22世紀に帰すべきである」「動物園を廃止すべきである」「北野台中学校は校内に自動販売機を設置すべきである」とし、過去の実践例を参考に第1反駁までのシナリオを各グループが作成しました。一番生徒に身近だと思われた自販機論題が、実は立論完成に一番手間がかかったという誤算はあったものの、履修した生徒は自主的に放課後も残って活動したり、チームのメンバーでよく話し合っていて楽しんで取り組んでいたように思います。また、札幌市教育委員会の社会科指導主事の方々や他校の先生方に参観していただいたり、北海道ディベート連盟の関係者にジャッジをしていただいたおかげで、生徒たちもいい緊張感を持って授業に臨めたと思います。

履修した生徒の感想文を見ると、「人前でスピーチする経験ができてよかった」「フローシートをとることで人の話を聞き取る力を身につけた」「ディベート経験者として、初めて取り組む人たちに教えることは難しかったが、勉強になった」「ディベートで身につける力は日常生活でも役に立つことがわかった」といった記述が目立ちました。

今後、時間を見つけて今回の実践をきちんとまとめようと思います。

本稿は『トライアングル』第57号  
(2006年5月号)に掲載されたものです。